

JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY
アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第 15 回 秋季研究集会 予稿集

2022 年 9 月 11 日(日)13時00分~16時20分
高知県立牧野植物園及びオンライン開催

アート・ドキュメンテーション学会
第77回 高知県立美術館石元泰博フォトセンター 見学会
第78回 高知県立牧野植物園/牧野文庫 見学会
第15回 秋季研究集会プログラム

【見学会】

2022年9月10日（土） 14：00 - 15：00

第77回見学会 高知県立美術館石元泰博フォトセンター 見学

- ※ 現地・10名限定
- ※ 高知県立美術館1階エントランス集合
- ※ コレクション展又は企画展の観覧券が必要です

2022年9月11日（日） 10：40 - 11：40

第78回見学会 高知県立牧野植物園/牧野文庫 見学

- ※ 現地・20名限定
- ※ 高知県立牧野植物園正門集合
(入園チケットをお渡しします)

【秋季研究集会】

2022年9月11日（日） 13：00 - 16：20

第15回 秋季研究集会

13:00- 開会挨拶 本間友(アート・ドキュメンテーション学会 幹事長)

【萌芽研究発表】 13:10 -14:50 (発表10分 コメント5分 質疑5分)

13:10-13:30	[発表1] 日隈脩一郎(東京大学大学院教育学研究科) 歴史資料を素材とした動的映像の組織化についての検討 コメンテーター:松山ひとみ(大阪中之島美術館)	p.5
13:30-13:50	[発表2] 石井淳(フリーランス) 展覧会の包括的情報モデルと構造化記述の試み コメンテーター:本間友(慶應義塾ミュージアム・commons /慶應義塾大学アート・センター)	p.6

13:50-14:10	[発表3] 高橋律子(金沢大学大学院人間社会環境研究科) 美術館における「作品」と「資料」という分類の課題 — 美術家資料のデジタル・アーカイブ化に向けた考察から コメンテーター:阿児雄之(東京国立博物館)	p.7
14:10-14:30	[発表4] 山本睦月(立命館大学大学院文学研究科) 舞踊公演の出版物のアーカイブ — 京都の「都をどり」公演を中心として コメンテーター:石黒礼子 (国立美術館本部国立アトリサーチセンター(仮称)設置準備室)	p.8
14:30-14:50	[発表5] 張欣慧(北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院) 広島平和記念資料館における「痕跡」の展示と記憶継承への取り組み コメンテーター:谷合佳代子(大阪産業労働資料館「エル・ライブラリー」)	p.9

【研究発表】 15:00 -16:00 (発表25分 質疑5分)

15:00-15:30	[発表1] 丸川雄三(国立民族学博物館) 文化遺産オンラインの新機能「タイムマシンナビ」の開発と活用	p.11
15:30-16:00	[発表2] 水谷長志(跡見学園女子大学) 内田剛史(早稲田システム開発株式会社) 吉本龍司(株式会社カーリル) MLA 連携論を素地とする建学者アーカイブの構築の意義と展望 — 跡見花蹊記念資料館(M)収蔵資料目録データベースおよび 大学図書館(L)蔵書 OPAC と花蹊日記全文テキスト(A)の 三者連携システムの構築の実装化へ向けた試行的研究から	p.13

【萌芽研究賞】 16:00 -16:15

16:15- 閉会の挨拶 赤間亮(アート・ドキュメンテーション学会 会長)

『アート・ドキュメンテーション研究』第31号 原稿募集	p.16
国際会議等参加支援申請者募集	p.17
アート・ドキュメンテーション学会 刊行物ご案内	p.18
アート・ドキュメンテーション学会 入会のご案内	p.19

【萌芽研究発表】

13:40 - 15:40 (発表10分 コメント5分 質疑5分)

歴史資料を素材とした動的映像の組織化の検討

An exploration of organizing moving images made of historical documents

日隈 脩一郎*

HIGUMA, Shuichiro

Resume:

報告内容要約 研究の方法としても動的映像制作がなされている現在、映像の参照形式を整備し、分野ごとの組織化を検討する必要がある。本発表では、博物館所蔵の歴史資料等を素材とした映画を例に、組織化対象を映像素材、台詞、音楽に分け、それぞれの記述手法の検討状況と展望を示す。

1. 問題の所在

動的映像の組織化については、李 (2016) 等によりその手法の不備が指摘されてきた。くわえて、映像種別の組織化手法については従来、自覚的な検討もされてこなかったように思われる。研究の対象としてのみならず、研究成果公表の方法としても映像制作が用いられる現在、映像資料種別に適切な参照形式を整備する必要性はますます高まっている。かかる研究の方法としての映像制作が学術研究のように集団化されていくとして、参照形式の未整備という状況は、映像相互の関係性等を一定の手続きを通じて明示することを困難にする。そこで本発表では、発表者が制作に関わった映画『籠城』(小手川将監督、2022年、以下「本映画」)を例に、歴史資料を素材とした動的映像組織化の取り組みにつき、現況を報告する。

2. 動的映像の組織化——映画『籠城』を例に

2.1 一高プロジェクトと映画『籠城』について

東京大学と北京大学との共同教育研究拠点・東アジア藝文書院では、そのオフィスの一つが、旧制第一高等学校時代の中国人留学生向けの講義棟だったことをきっかけに、資料調査等を行う研究課題「一高プロジェクト」が2019年より開始された。本映画は、一高プロジェクトの成果の一環であり、当時の寮日誌等を素材とした一種の資料映画である。次項では組織化の対象を分析し、現況を示す。

2.2 組織化の対象と現況・課題

1) 映像素材

寮日誌等の素材は、東大駒場博物館等に所蔵さ

れた歴史資料であり、それらはすべて目録化が済み、閲覧請求に対応している。作品のなかで、どの史料のどの部分が用いられているかは、書籍の引用形式に準じる。

2) 台詞

本映画の台詞には上述の史料を出所とするもの、オリジナルな脚本に基づくものがある。ともに書籍からの引用とみなせるが、既存の引用法では処理の難しい台詞の重複等につき、TEIに基づいたマークアップや知識グラフの活用等を試行中である。

3) 音楽

久保田翠氏制作の楽曲は、本映画の骨子を成す。なかには一高の寮歌に基づいたものがあり、当時の楽譜が残されているものが少なくない。映画音楽については、楽曲のどの部分がどのように用いられているかが、記述項目として必要であろう。

3. 展望

本映画は、ひとつには映像素材中の歴史資料の記述という、映画の記述一般と比べて特異な検討事項を有する。上述の検討をさらに進めつつ、例えばストックショットライブラリーなどとの関係を構築することで、歴史実践としての映像制作、その集団化・システム化に資することができよう。

参考文献

李東真「動的映像資料の組織化に関わる専門的・技術的問題の検討と作業手順の開発——在日朝鮮人関係資料室の収集資料を対象に」中央大学大学院文学研究科2015年度博士論文、2016.

*ひぐま しゅういちろう (東京大学大学院)

展覧会の包括的な情報モデルと構造化記述の試み —ミュージアムを中心に—

A comprehensive information model of exhibition and its structured description
- centered on museum

石井 淳*

Atsushi, Ishii

Resume:

現代社会における展覧会を一つの複合的なメディアと捉え、それを受容する一般市民の視点から、有意な情報モデルのあり方とその実装を考究している。今回、情報モデルの検討から構造化記述の試行までを行い、その結果を報告する。

1. 研究概要

本研究は、現代社会における展覧会をメディアの一つと捉え、それを受容する一般市民の視点から情報モデルの構築を試みたものである。展覧会そのものは期限の限られたイベントだが、その豊富な関連刊行物、会場や社会の様々な場所で様々に残存する多様な情報の広がりに着目し、それらを包括的に認識可能な情報モデルとはどのようなものか、考究を試みた。

本研究で考案した情報モデルは、展覧会に関わる事物のカテゴリーおよび個々の実体をほどよく識別可能な「展覧会情報のエンティティモデル」と、それより抽象的な、モデルを実際に構造化記述するための関係性に着目し整理した「展覧会情報のリレーションシップモデル」の組みで構成し、これらを「展覧会の包括的な情報モデル」と名付けた。

提案する「展覧会の包括的な情報モデル」に対して、実際に開催された10の展覧会を対象に適合性や有効性の評価と考察を行った。さらに、既存の一定程度支持された情報資源組織化の枠組み（オントロジーや共通語彙）としてCIDOC-CRMとWikidataの2つに着目し、これらによる記述を試行し、その実現性や特徴を整理した。

2. 構成

本研究は以下に述べる5つのステップで実施した。

1) 現代社会における展覧会の情報とその課題を整理し、解決に資するアプローチとして情報モデルの開発の必要性を論じ、関連研究を調査。

2) 参考文献や事例調査を元に情報モデルを考案し、実際の展覧会を適用し、その適合性や有効性を評価。

3) 2) で作成した情報モデルに対しCIDOC-CRMを用いた構造化記述（適用設計）を試み、その実現性・拡張方針・課題を検討し整理。

4) Wikidataを用いて同様の検討を実施。

5) 提案した情報モデルの研究目的に対する適合性や有効性を総合的に考察するとともに、本研究の遂行で得られた知見から導かれた課題と今後の展望を整理。

3. 謝辞

本研究は修士論文研究（石井淳．展覧会の包括的な情報モデルと構造化記述：ミュージアムを中心に．慶應義塾大学（図書館・情報学）、2021年度修士学位論文）として、慶應義塾大学文学研究科 谷口祥一教授のご指導を賜った。また、跡見学園女子大学 水谷長志教授にも貴重なご助言を頂いた。ここに謝意を記す。

*いしい あつし（フリーランス／2021年度慶應義塾大学文学研究科 図書館・情報学修了）。

本発表は、主に美術館における美術家資料アーカイブについて、キュレーターおよび美術史・社会学研究者の立場から考察するものである。発表者は、金沢 21 世紀美術館キュレーターとして、2014 年から 2021 年まで粟津潔アーカイブを担当した経験があり、キュレーターの立場からアーカイブについて考えてきた。美術館という実践の場で作品と関わるキュレーターはアーカイブの構築にどう関わるべきかについても考えてみたい。

1. 美術館における作品と資料

美術館は博物館の 1 つであるが、「博物館資料」は芸術的価値を持つ「作品」と、作品や作家に関連する「資料」の大きく 2 種に分かれている。作家が所蔵していた希少価値のある作品は「資料」として扱われることもあり、一次資料、二次資料という区分が有効でないケースも多々ある。本発表では、2020 年度から 2022 年度にかけて実施された中谷宇吉郎アーカイブズ推進プロジェクトにおける科学者資料アーカイブの成果を参照しながら美術館における資料とは何か、また美術家資料とは何かを整理を行う。

さらに美術家資料が美術館においてどのようにアーカイブされているか、横尾忠則現代美術館のアーカイブと、金沢 21 世紀美術館の粟津潔アーカイブの比較を行う。前者は収藏品リストとは別にアーカイブ資料リストが作成されている。一方、後者では、アーカイブ全体が収藏品として組み込まれている。両者の比較により、個人美術館と複数の美術家を扱う美術館との相違、また美術館における作品か資料かを分ける基準をどう設けるべきか検証する。

2. 複製芸術とエフェメラ

美術家資料アーカイブの課題として、版画やポスター等の複製芸術の取り扱いについてあげる。唯一無二を価値とする「作品」において、複数ある資料（あるいは作品）の価値をどう見極めるのか、その基準は定まっていない。特に、デザイナーアーカイブの場合、デザインされたアイテム類、例えばポスターやチラシ、パンフレッ

トが作品として評価される一方、同じものがエフェメラとして収藏品リスト外として扱われる例もある。収藏品リストに加わることによって、その資料に関する情報へのアクセスは圧倒的にしやすくなる一方、貴重資料扱いになることで、モノとしてのアクセスは難しくなる。このことは、情報とモノに利用者がどうアクセスできるかという課題とも大きく関わってくる。美術館において複製芸術やエフェメラがどのように位置づけられていくか検討していくことは、今後のデジタル・アーカイブ化が進み、施設を持たない博物館での作品・資料・情報の課題にもつながるのではないかと。デジタル化が、情報化であり、複製化でもあるという視点を持ちながら、美術館がどうデジタル・アーカイブを活用しうるのか考えていく必要があるだろう。

3. アーキビストとキュレーターの協働について

金沢 21 世紀美術館では、2015 年頃より、アーキビストとキュレーターである発表者が協働し、作品情報管理や作品画像管理などを進めてきた。キュレーターとアーキビストの対立構造も指摘されることがあるが、協働で進めることには大きなメリットがあった。またキュレーターが行う作品調査においても、現状保存の原則など、アーカイブの基本は、キュレーターが主に担当するモノとしての作品調査においても活用すべき方法論だろう。

アーカイブ作業においても取捨選択や優先順位を決定しなければならない場が必ずある。何を基準に判断するかは、美術館資料の特性でもある主に作家ないし作品評価と関わっており、キュレーターとしての視点が必要となってくる。キュレーターとアーキビストが連携することで美術家アーカイブとその利活用は格段に進むのではないかと。

アーキビストとキュレーターが互いに専門性をいかしながらチームを組み、協働で作業していくことの意義を示すとともに、アーキビストがキュレーターの視点を持つこと、あるいはキュレーターがアーキビストの視点を持つことが美術家資料アーカイブにおいてどのような意味を持つのか考えてみたい。

舞踊公演の出版物のアーカイブ ——京都の「都をどり」公演を中心として

An Archive of Dance Performance Publications
with an Example of the Miyako Odori

山本 睦月*

YAMAMOTO Mutsuki

Resume:

京都では明治5年に祇園甲部で舞踊公演「都をどり」が創始されて以来、他の花街でも毎年の舞踊公演が開催されるようになった。それらの公演時には毎年複数の種類の出版物が発行されるが、各時代を通覧するようなアーカイブや研究はなされていない。しかしDB化の活用により、花街の舞踊公演・舞踊史の研究は、観客や演者など舞踊自身ではなく環境論と結びつけてより深められると期待する。

1. はじめに：研究分野の状況

花街では毎年の舞踊公演が開催され、多くの観光客を惹きつける。明治5年に祇園甲部で創始された「都をどり」は京都の花街舞踊公演のなかで特に長い歴史を持ち、現在では京都の春の風物詩にもなっている。こうした舞踊公演では、明治以降毎年多くの種類の出版物が発行されてきた。冊子だけでも戦前には一度の公演につき3冊以上も発行されるなど、舞踊公演の出版物は他の芸能の出版物とは異なる特徴を持つ。しかしながら、それらの出版物全体のまとまったアーカイブは存在せず、デジタル化も進んでいない。そのためか、これらの出版物を対象とした研究は進んでいない。

2. 舞踊公演出版物のアーカイブ

国立国会図書館には数冊の冊子がデジタル化されており、京都府立京都学・歴彩館には戦前戦後を合わせて約80件余りの冊子が所蔵されているが、デジタル化はされていない。またこれらを併せても各時代を通覧するには至らない。今回、発表者は個人で約130件を有するコレクションの調査を許可され、デジタル化とデータベース化を行なった。舞踊公演の出版物には、大きく分けて、刷物、冊子体プログラム、写真帖の3種類が存在する。

3. 刷物の規格・内容の変遷

刷物は明治6年のものからDBに登録されてい

る。内容は唱歌のみのもの、番組や茶席出勤表がついているもの、「鑑賞の手引き」とされているものなど数種類がある。規格は20×60cmの横長の両面刷りのものが多く、大きな変動は少ない。

4. 冊子の規格・内容の変遷

冊子は明治35年のものからDBに登録されている。初期の頃から英語の解説文や出演する芸舞妓らのブロマイド写真も掲載され現在にまで至る。規格は縦長のものから始まり、16×24cmなど小さめのものが戦前に多く出版され、昭和30年には現在のB5版へと統一されていった。

5. 「写真帖」の規格・内容の変遷

戦前には「写真帖」も歌舞会承認のもと出版される。確認できるものでは大正13年のものが最も古く、内容は他の冊子と変わらない。規格は16×24cmのものが多いが変動する。

6. おわりに

「都をどり」では、以上のような出版物が毎年複数の発行者から発行され、それぞれ観客に配布・販売されてきた。このような現象は他の芸能公演と比較しても類をみない。これらをDBに登録し活用することで、各出版物の細かな差異を見出すことが可能になる。そこから当時の観客層や演者の変遷など、舞踊そのものではない環境論と結びつけることにより、花街の舞踊公演や舞踊史の研究をより深めていくことができるのではないかと発表者は期待する。

*やまもと むつき（立命館大学大学院文学研究科博士課程前期）

広島平和記念資料館における「痕跡」の展示と記憶継承の取り組み

The Exhibition of Material Traces and Hiroshima Narratives in Hiroshima Peace Memorial Museum

張 欣慧*

ZHANG, Xinhui

Resume:

ヒロシマの表象不可能性と対峙しつつ、痕跡を通じていかに原爆の体験と記憶を世代を超えて伝えようとするのか。広島平和記念資料館の本館における痕跡の展示表象を考察することで、実物資料による情報発信のあり方について考えるきっかけになることを期待する。

1. はじめに

1955年8月に開館した広島平和記念資料館の本館(以下、本館)は、被爆体験と記憶の継承の拠点として重要な役割を担っている。本館は2019年に三度目となる大規模なリニューアルを行い、論争的な被爆蟻人形や原子爆弾の原寸大の模型などの模型を撤去し、「被爆者の視点から、実物資料を中心に被爆の実相を伝える」といった整備方針を基に、被爆の跡を留めた瓦礫や石、被爆者の遺品、被災写真などの痕跡の「過度の演出を抑えたシンプルな展示」¹を設けた。これらの痕跡は、原爆の直接・物質的証拠として記憶の真正性を担保する一方、資料館側が添えたいメッセージを発信するため、その展示表象が以前にも増して強調されるようになる。「本物」による展示を第一に据える博物館における実物資料の情報発信のあり方を、原爆の痕跡だけを活用して意味的空間を創出するという本館の取り組みから再発見することが可能となる。

2. 痕跡による被爆体験と記憶の視覚化

展示される痕跡は、主に被災写真、被爆の跡を残す瓦礫や鉄材、被爆者の遺品と遺影である。

1) 被災状況を示す写真

地上から撮影されたキノコ雲の写真や被爆後の街の写真が、人間の直立視線と同じ高さで展示され、熱線や放射能を浴びた身体表面の写真とともに最初のコーナー「8月6日のヒロシマ」を構成する。写された光景を客観的な記録だけ

ではなく、観者にある程度の臨場感を持って追体験させようという姿勢が伺える。この視線の誘導により、「8月6日」のストーリーの内側で原爆の全体像を捉えることが期待される。

2) 被爆物:瓦礫、瓶の塊やガラスの破片など

被爆物がほとんどむき出しにして水平視線より低い位置で展示される。ガラスケースに収まったという従来の手法に比べ、被爆物の礼拝的価値を弱め、観者との空間的、心理的距離を縮め、原爆で荒野となった街への想像を誘発する。

3) 被爆者の遺品と遺影

一部の生徒たちの遺品と服は大型のガラスケースに収まれ、「8月6日のヒロシマ」の一環として展示される。より多くの遺物は「被爆者」コーナーに立体的に陳列され、または持ち主の遺影と遺族の回想とともに、感情に訴える方法で展示される。服による身体性の喚起と生き生きとした回想が死者への喪と共存することにより、一人ひとりの物語を断片的でありながらも構築し想像させる、ということが伺える。

3. 実物資料による情報発信の展望

実物資料は「かつてあった」に関する記述であり、現在との時空間的な隔たりを容易に感じさせるため、追体験や記憶分有の実現は難しい。一方、観者がある場に触れ、当事者性を獲得することで過去を想像し追体験するが重要である。こうした観者による実物資料への能動的な関与の可能性は、本館の展示において示唆される。

¹ 広島平和記念資料館展示整備等基本計画, 広島市公式ホームページ, 2019年10月21日。
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace/9619.html> (Accessed 2022-08-01)

【研究発表】

13 : 40 - 15 : 40 (発表 25分 質疑 5分)

文化遺産オンラインの新機能「タイムマシンナビ」の開発と活用

Digital Viewer “Time Machine Navi” on Cultural Heritage Online

丸川 雄三*

MARUKAWA, Yuzo

Resume:

文化遺産オンラインリニューアルの一環として、新たに「日本列島タイムマシンナビ」(以下、タイムマシンナビ)を開発し2022年4月に公開した。タイムマシンナビが、モバイル端末での利用に適したデジタルビューアであることを確認し、活用の可能性と課題を示した。

1. はじめに

2004年に試験公開版¹をリリースした文化遺産オンライン²は、2008年の正式公開を経て、2011年には地図検索などを盛り込んだ規模の大きなリニューアルを実施した。当時の普及状況などから、スマートフォンやタブレットなどのモバイル端末での利用を想定しないシステムとして運用を続けていたが、2022年4月のリニューアル³により、ようやくモバイル端末への対応(以下、モバイル対応)を果たすことができた。本発表では、リニューアルにあわせて開発し公開した「タイムマシンナビ」を取り上げ、活用の可能性と実用上の問題点について論じる。

2. リニューアルの要件とタイムマシンナビ

文化遺産オンラインギャラリーへのモバイル端末によるアクセス数は、2015年7月時点では全体の25%であったが、2021年7月には40%となり、全てのアクセスの半数近くに迫る勢いで増加を続けている。モバイル対応を施していない時点でこれだけの利用がなされていることから、モバイル対応により、さらに多くの利用が見込まれることが期待できる状況であった。

そこで文化遺産オンラインでは、ギャラリーを対象に、モバイル対応を主な目的とした更新を実施することとなった。リニューアルの要件は次の通りである。1)スマートフォン、タブレットでの利用に対応する、2)高精細画像、動画、3D映像などマルチメディアに対応する、3)日本語と英語の表示切り替えをふまえる、4)学校や家庭における学習利用を想定する、5)時代、分野、地域を中心に、インデックスを拡張する、6)作品詳細ページ

から、サイト内への導線を増やす、の6項目である。以上をふまえてウェブサイトの構成を起こし、バックエンドシステムおよびウェブインタフェースの制作を実施した。

タイムマシンナビは、これらの要件を満たす新たなデジタルビューアとして構想し開発された。構成にあたっては、短い時間でなるべく多くの作品に出会えるよう、モバイル対応を念頭に、文字入力や検索を意識せずにタッチ操作のみで利用できるように工夫した。作品画像を中心に配置した画面と、スライダ操作によるシンプルなナビゲーションが特徴である。

3. タイムマシンナビの操作方法

タイムマシンナビは文化遺産オンラインギャラリーの一部であり、ブラウザ上で利用できる。タイムマシンナビを起動した時に表示される作品⁴はあらかじめ検索によって絞り込まれており、自動スクロールあるいはフリップ操作によって、次々と画面を送ることができる。操作はタッチパネルのほか、マウスホイールにも対応しており、PCでの操作も容易である。作品画像はタップ(あるいはクリック)することで拡大され、さらに詳細ページへと遷移することが可能である。

画面下方のコントロールパネルには、2本のスライダが配置されている。これを操作することで作品を時代と地域で絞り込むことができる。また検索条件は、タイムマシンナビを開く際のURLに直接埋め込まれている。脚注4の表示例には、検索条件として「国宝・重要文化財」が設定されており、現在、文化遺産オンラインのトップページに「タイムマシンナビ」として掲載しているリン

*まるかわ ゆうぞう(国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 准教授)。

クから辿ることもできる。さらにコントロールパネル右下の「検索条件」から検索結果一覧画面に戻ること、条件の変更も可能である。

4. ColBase との自動連携とデータマッピング

タイムマシンナビは大きく二種類の絞り込み機能を備えている。ひとつはタイムマシンナビを開く際に設定される、検索条件による絞り込みである。もうひとつは時代と地域のスライダによる絞り込みであり、利用者に作品情報への多面的な切り口（ファセット）を提供している。いずれも新規に開発されたバックエンドシステムとの連携により実現しており、検索機能の向上が寄与するところは大きい。ただし、タイムマシンナビによる閲覧を、より意味のある体験へとつなげるには、検索機能の準備だけでは十分ではない。登録されている作品の情報に、時代や地域のインデックスが適切に付与されていることが必要である。

例として、東京国立博物館の登録作品をタイムマシンナビで見てみよう⁵。全件表示の状態から時代のスライダを「日本・縄文」にセットすると、縄文土器や斧形石器が表示される。スライダを左端から右端へ移動させることにより、東京国立博物館の所蔵資料が、古代から近代へと時間軸に沿って次々に表示されることが確認できる。

東京国立博物館の作品（所蔵資料）情報の登録は、ColBase⁶との自動連携により実現している。連携当初、文化遺産オンライン独自の「時代」のインデックスは空のままであった。そこで連携元の「時代世紀」を対象に、その後にデータマッピングを設計し実施していた。この整備作業によって時代のインデックスが適切に付与されていたため、タイムマシンナビによる閲覧において、時代ごとの絞り込みが効果を発揮できたものと考えられる。

5. まとめと課題

文化遺産オンラインリニューアルの一環として、「日本列島タイムマシンナビ」を開発し公開した。タイムマシンナビは、タッチ操作のみで操作が完結することなどから、モバイル端末での利用に適しており、利用者は短い時間でより多くの作品情報に触れることができる。さらに時代と地域のスライダによるファセットナビゲーションは、専門知識や検索を必要としないより直観的な閲覧を可能にしている。タイムマシンナビは、利用者に新たな鑑賞体験を提供し得るデジタルビューアであると言えるだろう。

さらにタイムマシンナビは URL による検索条件の埋め込み機能を備えており、表示する作品を絞った形での提供が可能である。タブレット端末との相性も良く、授業や家庭学習での利用などが期待できる。作品情報を登録している参加館は、所蔵作品を紹介するツールとして、自館のホームページにリンクを掲載することも可能である。

タイムマシンナビの効果的な利活用においては、作品情報への適切なインデックスの付与が課題となる。登録されている作品情報をより効果的に活用するため、データの整備についても引き続き取り組みを進めて参りたい。

文化遺産オンラインは文化庁と国立情報学研究所が共同で運営する文化財のポータルサイトです。今回のサイトリニューアルも運営チームを中心に取り組み実現しました。近藤亜子室長をはじめ、文化庁の関係者の皆さま、高野明彦先生、バックエンドおよびフロントエンドの開発と運用にご尽力いただいた皆さまに、深く感謝いたします。また、日頃からご理解とご協力をいただいております参加館の皆さまと、ご利用の皆さまに、厚く御礼を申し上げます。

1 「文化遺産オンライン試験公開版の構築」『アートシーンを支える』（デジタルアーカイブ・ベーシックス 4、高野明彦 監修／嘉村哲郎 責任編集）勉誠出版、pp. 233-248、2020。

2 「文化遺産オンライン」 <https://bunka.nii.ac.jp/>

3 「文化遺産オンライン」のリニューアル、<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/93697801.html>

4 「タイムマシンナビ」表示例、https://bunka.nii.ac.jp/heritages/time_machine?classificationCds=1%2C2

5 「タイムマシンナビ」による「東京国立博物館」の表示例、

https://bunka.nii.ac.jp/heritages/time_machine?organizationName=東京国立博物館

6 「ColBase: 国立文化財機構所蔵品統合検索システム」、<https://colbase.nich.go.jp/>

MLA 連携論を素地とする建学者アーカイブの構築の意義と展望 — 跡見花蹊記念資料館(M) 収蔵資料目録データベースおよび大学図書館(L) 蔵書 OPAC と花蹊日記全文テキスト(A) の三者連携システムの構築の実装化へ向けた 試行的研究から

Meanings and Perspectives on Archives of Academic Institutes' Founders based on the
Ideas of MLA Collaborations - through the Trial Construction of the Prototype
System of Bridging MLA-M: Atomi Kakei Memoria Museum, L: Atomi University Library,
and A: Full text database of *Diary of Atomi Kakei*

水谷 長志* 内田 剛史** 吉本 龍司***

MIZUTANI, Takeshi; UCHIDA, Takeshi; YOSHIMOTO, Ryuuji

Resume:

「MLA 連携は学部学生の新たな調査研究手法になるだろうか？」を本学会 2018 年度秋季研究集会において発表した。その後、本務校の特別研究費の採択を得て、2019 年度「MLA 連携論を素地とする調査研究メソッドの可能性の検証と開発及び跡見花蹊史資料の MLA 連携横断のための試行的システムに向けた予備的調査」、2021 年度「跡見花蹊アーカイブにおける MLA 連携を内包するシステム構築のための予備的研究 (i) —MA 連携から見る花蹊日記における花蹊ユニーク語彙の出現にかかわる実事例検証の試み」を経て、本年度 2022 年度「跡見花蹊アーカイブにおける MLA 連携を内包するシステム構築のための予備的研究 (ii) —本学花蹊記念資料館 (M) 収蔵資料目録データベースおよび大学図書館 (L) 蔵書 OPAC と花蹊日記全文テキスト (A) の三者連携システムの構築の実装化へ向けた試行的研究」を実施しているところである。これは研究題目の通り、本務校内の MLA の 3 つの研究情報資源にわたって、横断検索システムを早稲田システム開発・カーリルとの共同において構築する模様を報告し、あわせて大学アーカイブの構築における MLA 連携の課題と展望を述べるものである。

1. 2018 年本学会秋季研究集会以後の展開 —2019-2021

上記 Resume の通り、2019-21-22 年度の特別研究費を得ての成果^{1,2}に詳述した通り、「MLA 連携は学部学生の新たな調査研究手法になるだろうか？」の問題意識は、図 1 から図 2 への、すなわち起点である M(useum)を拡張して S(subject)へ移行することにより、より一層汎用性の高い「新たな調査研究手法」のモデルを提案するものであった。

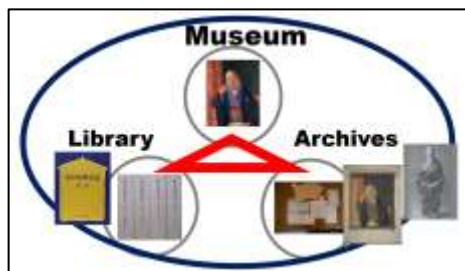


図 1 黒田清輝筆《跡見花蹊肖像》をめぐる MLA 連携

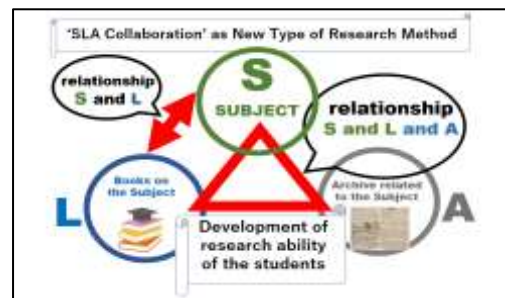


図 2 SLA 連携 S=L の二項関係から S=L=A の三項関係へ

2. 大学史アーカイブの核としての建学者アーカイブの位置づけと構築の意義

学祖と呼ばれ、初年度生の必修科目として「花蹊の教育とライフプラン・キャリアプラン」が組まれるように、2025 年 150 周年を迎える本学においては、跡見花蹊という建学者の顕彰と検証は必須であり、学内の精神的支柱であるとともに学外へ向けてのブランディングイメージの発揚の源になることを保証するためにも建学者アーカイブの構築が急務であること

*みづたに たけし (跡見学園女子大学) **うちだ たけし (早稲田システム開発株式会社) *** よしもと りゅうじ (株式会社カーリル)

は、先行の、例えば津田塾大学、自由学園などが周年事業として築いた好例が示す通りである。近年の大学アーカイブズ論³を踏まえるならば、下記の図のように示すことが適当であろうと考えている。

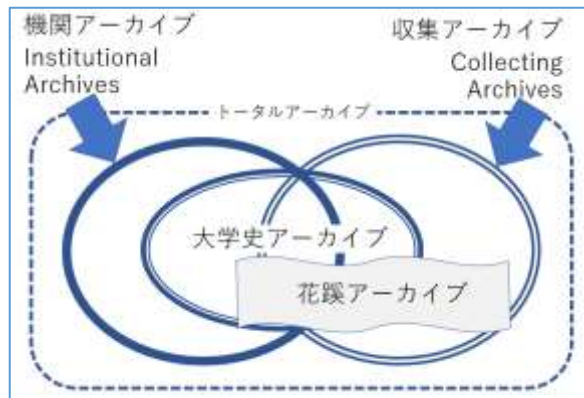


図3 大学アーカイブの関連 トータル/機関/収集/大学史/花蹊のA

かつ、1章での経緯と課題「MLA 連携の事例を探す」の中で受講の学生が最も困難を示すのが、アーカイブズの把握・発見であることを鑑み、喫緊の構築可能なアーカイブズのデジタル化のターゲットを『花蹊日記』の全文検索システムの構築に置いたのが2021年度であった。同検索システムも次章の花蹊作品と同様、早稲田システム開発の I.B.MUSEUM SaaS に構築したものである。

3. 花蹊記念資料館 (M) 収蔵資料目録データベースおよび大学図書館 (L) 蔵書 OPAC と花蹊日記全文テキスト (A) の三者連携システムの構築の実装化へ向けて

2022年度に入って、学内組織である花蹊記念資料館が2018-2020年度の3年度にわたり刊行した同館『収蔵資料総合目録1-3』所収の花蹊書画の169点の文字データを早稲田システム開発の I.B.MUSEUM SaaS に搭載、連携検索はカーリルによる。表1はその項目とサンプルデータの一覧である。賛以下のテキストデー

タの充実に特徴があるとも言える。グレーはダミーデータ。

資料ID	22
資料番号	V1_022
元ID	資料NO.31
資料名	八十自壽詩
人物(名簿)	跡見花蹊
技法	紙本墨書
形状	一幅
寸法(図録用)	133.8×63.0cm・209.0×77.5cm
和暦	大正8
制作年代	1919
賛	はなち飼ふ牛ものどかに遊ぶらむ(後略)
本文	手把金厄喜不禁 五千弟子漸成林(後略)
款記	大正八年第一月八十自壽 花蹊女史
説明書き	「四季のはな」を小屏風に仕立てたもの
題名(裏書)	「藤河原鳥之圖」
印章	引首印「澹泊明志」白文長方印(後略)
資料名典拠	花蹊記念資料館総合目録1(2018)

表1 I.B.MUSEUM SaaS でのサンプルデータ

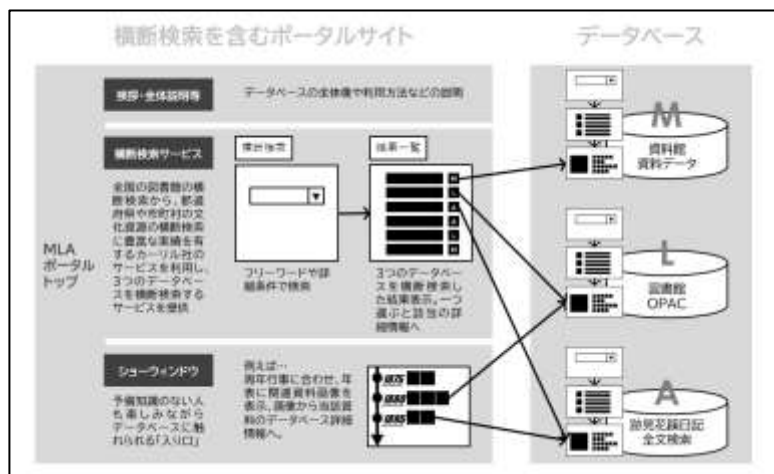


図4 三者連携システムのモデル図

4. 課題と展望

一大学の極小でローカルな MLA の関係構造をジャパンサーチの大規模 Portal へ反映する方法があり得るのかが、現在の課題と展望と捉えている。

1 「MLA 連携〔論〕は学部学生の新たな調査研究メソッドになるだろうか?—ミュージアムの中のライブラリ&アーカイブで構想した〈MLA 連携〉から大学の教育現場で提案する新たなリサーチ・メソッドとしての〈SLA 連携〉へ」 <http://id.nii.ac.jp/1612/00003580/> (Accessed 2022-08-04)

2 「MLA 連携〔論〕を素地とする建学者アーカイブの構築の意義と展望—『跡見花蹊日記』のフルテキスト・データベースの構築とユニーク語彙の出現に係る検証の試みを中心に」 <http://id.nii.ac.jp/1612/00004015/> (Accessed 2022-08-04)

3 菅真城『大学アーカイブズの世界』(2013)、加藤諭『大学アーカイブズの成立と展開—公文書管理と国立大学』(2019)ほかを参照。

発表者プロフィール（発表順・敬称略）

日隈 脩一郎（ひぐま しゅういちろう）

東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻博士後期課程
2017年、東京大学文学部哲学専修課程卒業。2020年、同大学
院教育学研究科修士課程を修了し現職。同大教育学部・大学院
教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターRA、同
大公共政策大学院 RA のほか、東京大学文書館でアルバイト
（目録化作業等）、国立新美術館でインターン（教育普及）と
して勤務。研究領域は大正・昭和戦前期日本の教育思想史、と
りわけ教育学の制度化・社会化過程にあたって教育学者が果
たした理論的貢献をさしあたりの検討課題としている。これ
に関連し、広く学術研究の成果と社会との関係という主題の
下、サイエンスコミュニケーションやアーカイブズ学、博物館
学等にも関心を寄せてきた。2020年11月より2022年3月
まで、東京大学東アジア藝文書院 RA として映画『籠城』の制
作に記録として従事。

石井 淳（いしい あつし）

フリーランス

2002年 奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科博士前
期課程修了（工学）。2018年までシステムインテグレーターに
てIT基盤の設計・開発・運用に従事。ITIL v3 Expert, 情報
処理技術者試験システム監査合格 など。2022年 慶應義塾大
学文学研究科修了（図書館・情報学）。情報と運用（標準化・
組織化・ドキュメンテーション）、メディアとリテラシーの関
係に関心を持つ。

高橋 律子（たかはし りつこ）

金沢大学大学院 人間社会環境研究科

キュレーター・研究者。東京大学大学院教育学研究科（社会教
育）修士課程修了。金沢美術工芸大学大学院博士後期課程修了
（博士号取得）。現在、金沢大学大学院博士後期課程在学中。
専門はジェンダーとアートの社会学・美術史。美術館の公共性
への関心からアーカイブの重要性を認識。2005年から2022
年1月まで16年余在籍した金沢21世紀美術館では、キュレ
ーターとしてアーキビストと協働し、アーカイブ業務に携わ

った。現在は、NPO ひいなアクション代表として、子育てす
るアーティスト支援を中心に活動を行っている。

山本 睦月（やまもと むつき）

立命館大学大学院文学研究科文化情報学専修博士課程
前期課程2回生

京都芸術大学芸術学部アートプロデュース学科アートプロデ
ューズコース卒業後、2021年より現専修に在籍。都をどり
をはじめとする京都花街の舞踊公演で発行されてきた出版物を
主な研究対象とし、現物を収集し撮影したデジタルアーカイ
ブを構築・活用した研究を行なっている。出版物の規格や内容
の変遷と舞踊公演や花街の歴史など出版物を取り巻く環境論
とを結びつけ、花街舞踊公演の位置付けを新たに見出すこと
を試みている。

張 欣慧（ちょう きんえ）

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院

国際広報メディア研究科博士後期課程3年

学部時代はジャーナリズムを専攻したが、2019年により現専
攻に在籍。メディア文化論分野に所属して、視覚文化や記憶の
展示表象に関心を持つ。具体的な研究課題は、広島原爆の物質
的痕跡を自分の作品に引用し、ヒロシマの記憶を語り継ぐ現
代アートの事例を通して、記憶メディアとしての「痕跡」の表
象とそれによる記憶継承の可能性を考察することである。

丸川 雄三（まるかわ ゆうぞう）

国立民族学博物館 人類基礎理論研究部 准教授

2003年、東京工業大学大学院博士後期課程（計算工学専攻）
修了。博士（工学）。東京工業大学精密工学研究所助手、国立
情報学研究所連想情報学研究開発センター特任准教授、国際
日本文化研究センター文化資料研究企画室准教授を経て、
2013年10月から現職。専門は連想情報学による文化情報発
信手法の研究。これまで手掛けた主なサービスは、「文化遺産
オンライン」、「東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづ
ゑ』の世界」、「日本アニメーション映画クラシックス」など。

水谷 長志 (みずたに たけし)

跡見学園女子大学文学部 教授

金沢大学法文学部、図書館情報大学図書館情報学部卒業。独立行政法人国立美術館本部事務局情報企画室長 / 東京国立近代美術館企画課情報資料室長を経て、2018年春から現職。専門は図書館情報学、美術図書館学。主な著作に『図書館文化史』(勉誠出版、2003)、共著書に『MLA 連携の現状・課題・将来』(勉誠出版、2010)、『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』(樹村房、2023刊行予定)』他。第9回図書館サポート・フォーラム賞(2007)、国立美術館キュレーター・オブ・ザ・イヤー賞(2016)、第11回アート・ドキュメンテーション学会推進賞(2017)を受賞。

内田 剛史 (うちだ たけし)

早稲田システム開発株式会社 代表取締役

大阪外国語大学外国語学部イスパニア語学科卒業。第一勲業

銀行(現・みずほ銀行)等を経て、2004年から現職。事業

を通じて、各地のデジタルアーカイブに関わる。共著書に

『被災写真救済の手引き』(国書刊行会、2016)、自社刊行物として『ミュージアム/文化財/史跡担当者のための ICT 活用事業 企画の手引』など。第28期・第29期東京都立図書館協議会委員、文化審議会博物館部会法制度の在り方ワーキンググループ委員などを務める。

吉本 龍司 (よしもと りゅうじ)

株式会社カーリル 代表取締役・エンジニア

慶應義塾大学環境情報学部卒業。フリーソフトウェアやシェアウェアなどを開発するかたわら、企業や行政の情報システムの構築や、様々なウェブサービスの立ち上げに関わる。2010年、全国の図書館をまとめて検索できるウェブサービス「カーリル」を立ち上げる。同サービスを運営する株式会社カーリル代表取締役・エンジニアを務める。

『アート・ドキュメンテーション研究』第31号原稿募集

『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会では、第31号(2023年5月刊行予定)に掲載する原稿を募集しています。

研究論文は査読対象となりますが、その他に研究ノート、事例報告、資料紹介、書評なども歓迎いたします。詳しくはJADSウェブサイトの投稿規定をご覧ください。

投稿をお考えの方は、原稿の仮題と概要(400字程度)、および、できれば原稿種別(投稿規定3.を参照)を、エントリー期限までに、編集委員会宛にご連絡ください。

なお、2022年前半に、当『研究』誌の投稿規定および執筆要領を改訂いたしました。いずれもJADSのウェブサイトに掲載しておりますので、投稿の際にはこれらをご確認ください。また、エントリーを行いました方には、原稿執筆用のテンプレートをお送りしますので、これに沿ってのご執筆をお願いいたします。

JADS会員の皆様からの、ふるってのご投稿をお待ちいたしております。

エントリー期限 : 2022年9月30日

原稿提出期限 : 2022年12月15日

査読・編集 : 2022年12月~2023年5月

投稿規定・執筆要領の掲載先 : <http://www.jads.org/pub/pub.html>

連絡先 : 『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会 kenkyu_editor@jads.org

アート・ドキュメンテーション学会 2022年度 国際会議等参加支援申請者募集

アート・ドキュメンテーション学会国際交流委員会では、アート・ドキュメンテーション関係者間の国際交流及び国際動向の把握を図るため、関連する国際会議等に参加される方に対して、渡航・宿泊等の費用を補助します。これまで2010年度から12年間で8名の会員に対して支援を行いました。

支援申請の対象となるのは、2022年度及び2023年度の2年間に、国内および海外で開催される国際会議等です。昨今の情勢を鑑み、参加費の発生する国際会議のオンライン参加も支援申請の対象といたしました。

ぜひ研究計画や自己研鑽のプランニングに合わせて積極的にご申請いただき、JADSの国際交流活動のひとつにご参画ください。皆様のご応募をお待ちしております。

補助金額

10万円上限

申し込み順に審査を行い、年間の交付決定額が上限に達したところで今年度の採択は終了します。応募に対する交付額は、上限の総額（または応募時の支給可能残額）から行き先等を考慮し適宜決定、一人あたりの上限は5万円とします。

条件

- (1) 本学会の会員であること（入会して10年未満の会員を優先する）。
- (2) 2022年4月1日から2024年3月31日までの間に、国内外で開催される国際学会、国際会議等に参加すること（オンラインによる有料の国際会議も含む）。
- (3) 参加後、会議等の内容について、JADSの研究会（地区部会、SIG等を含む）あるいは『アート・ドキュメンテーション研究』誌上にて報告すること。

申込み方法

国際交流委員会宛に電子メールにて、下記必要事項を記載してお送りください。

必要事項：

- (1) 氏名・所属
- (2) 会員種別
- (3) 連絡先（住所、電話番号（携帯番号も可）、E-mail）
- (4) 参加する会議等の名称（あればURL）
- (5) 主催者
- (6) 開催地
- (7) 開催及び参加の日程
- (8) 経費総額とその内訳（渡航費、宿泊費、参加費等、見込みの概算で可）
- (9) 本支援費以外に補助金等を受ける場合、その内容についての説明（補助金名称、支援額等）
- (10) 学生の場合、身許を確認できるJADS正会員1名の氏名

※選考のため、申請者に対して上記以外にも必要な情報について問い合わせることがあります。あらかじめご了承ください。

送付先：

jads_international@googlegroups.com

締切

2022年12月末日

申し込み順の審査、交付のため、上限額に達し次第、申請受付を終了いたします。

審査と交付

申請受理後、国際交流委員会にて審査を行い、執行役員会で決定します。結果は本人に通知し、採択者には決定からひと月を目途に決定金額を指定口座に振り込みます。

来年度実施分について交付を受けながら都合により参加を取りやめた場合には、全額を返金していただきます。また、渡航機会を採択時に決定したものと別の会議等に変更した場合には、別途申し出と承認が必要になります。

問い合わせ先

国際交流委員会（担当・古賀）

jads_international@googlegroups.com

アート・ドキュメンテーション学会

刊行物販売のお知らせ

2022/8

本学会刊行物をご購入いただけます。お申し込みは毎日学術フォーラムまで（別途送料がかかります）。

◆刊行物バックナンバー

『アート・ドキュメンテーション研究』 第30号	(2022年5月刊)	定価¥3,000+税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第29号	(2021年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第27・28号	(2020年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第26号	(2019年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第25号	(2018年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第24号	(2017年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第23号	(2016年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第22号	(2015年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第21号	(2014年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第20号	(2013年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第19号	(2012年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第18号	(2011年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第17号	(2010年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第16号	(2009年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第15号	(2008年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第14号	(2007年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第13号	(2006年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第12号	(2005年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第11号	(2004年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第10号	品切		
『アート・ドキュメンテーション研究』 第9号	(2001年7月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第8号	(2000年7月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第7号	(1999年9月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第6号	(1997年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第5号	(1996年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第4号	(1995年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)	
『アート・ドキュメンテーション研究』 第1～3号	品切		
『アート・アーカイヴ：多面体：その現状と未来：記録集』(2010年9月刊)	定価¥500 (税込)	品切	
『日本のアート・ドキュメンテーション：20年の達成：MLA連携の現状、課題、そして将来：予稿集+資料編』	(2000年12月刊)	定価¥1,000+税	品切
『国際シンポジウム：東アジアにおける美術・文化財情報のネットワーク化を考える：報告書』	(2005年1月刊)	定価¥1,000 (税込)	
『arsの現場とツールの諸相Ⅱ』(ars-WG叢書・2)	(2000年3月刊)	定価¥1,000 (税込)	
『報告書：シンポジウム：フランスにおける美術情報の普及と専門教育』	(1998年3月刊)	定価¥1,500+税	
『美術情報と図書館：報告書』	(1995年3月刊)	定価¥2,500 (税込)	

◆お問合せ・お申し込み

株式会社 毎日学術フォーラム

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル

Tel : 03-6636-0956 (販売直通) Fax : 03-6267-4555 E-mail: maf-sales@mynavi.jp

お申し込み方法 : <https://maf.mynavi.jp/sales>

■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイヴ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性と芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティーや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキヴィスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約300名・機関の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイヴおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として創設され、1999年に日本学術会議の第18期登録学術研究団体(情報学・芸術学)に加入後、2005年4月に現在の学会名に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会(ARLIS/UK & Ireland)の*Art Libraries Journal*(2013, Vol. 38, No. 2)の「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究しています。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざまな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を実行し

ています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的な要請に即したデータベースの構築、アーカイヴ・デザイン、また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあげています。

■活動内容

・研究会、講演会、見学会の開催

・地区部会とSIGの活動

現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。

また、日常活動の場として、会員の興味に応じてSIG(スペシャル・インタレスト・グループ)を結成することができます。現在、美術館図書室SIG、デジタルアーカイブサロンSIG、JADS Archives and Archival Methods SIG(学会アーカイブSIG)があり、自由に参加できます。

(地区部会・SIG連絡先:

<http://www.jads.org/contact/contact.htm#sig>)

・インターネット・ホームページ(日本語版・英語版)の開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる会員交流

・情報・資料の収集・交換・提供

・アート・ドキュメンテーション関係者の交流

・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行

・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・維持(上記『研究』並びにHPで提供)

・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・維持(HPで提供)

・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携

・IFLA(国際図書館連盟)の協会会員として、美術図書館分科会の活動への参加・協力

・ARLIS/UK等各国の同種組織との連携

・国際会議等参加支援のための助成金の支給

その他、この会の活動に必要な事業を行います。

■会員の特典

- ・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先的に参加できます。
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』(年3回)、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』(年1回)の配付を受けられます(賛助会員は各2部送付)。

■年会費 [年度単位]

会員種別により、以下の会費となります。

- ・正会員 6,000円 (ただし、65歳以上は4,000円 [自己申告制])
- ・学生会員 4,000円 (大学学部、大学院などに在学中の学生。申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます)
- ・賛助会員 (個人または機関・団体) 一口以上 (一口 30,000円)
- ・団体購読会員 12,000円

■ホームページ

- ・活動の詳細については、ホームページをご参照ください。
<http://www.jads.org/>

■入会方法

- ・HPから「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記の間合せ先に郵送またはメール添付にてお送りください。役員会にて入会を承認された方に、初年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は会費の入金をもって、入会手続の完了とします。
(入会申込書ダウンロード：
<http://www.jads.org/nyukai/nyukai.html>)

お問合せ・お申し込み

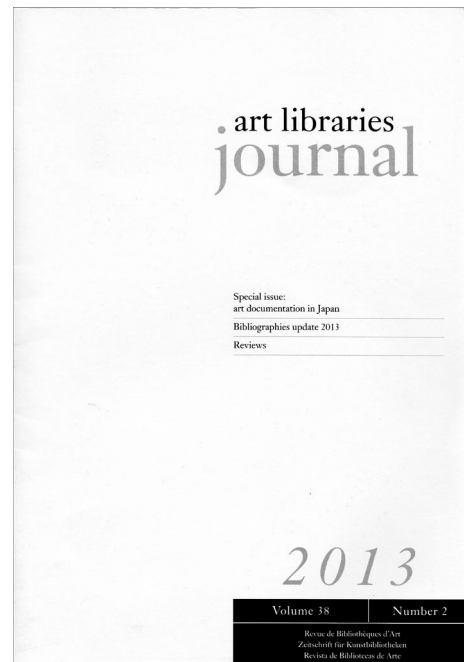
アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1

パレスサイドビル (株) 毎日学術フォーラム内

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555

E-mail : maf-jads@mynavi.jp



Art Libraries Journal(2013, Vol. 38, No. 2)

「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

2022年8月18日現在

JADS

アート・ドキュメンテーション学会

第 15 回秋季研究集会予稿集

発行日：2022 年 9 月 11 日（日）

編集：アート・ドキュメンテーション学会 行事・企画委員会

発行：アート・ドキュメンテーション学会

<http://www.jads.org>